

〈共同討議 | 概要報告〉

「カテゴリーの超越論的演繹（第二版）」を読み直す

中野 裕考

1772年2月21日ヘルツ宛書簡で初めて定式化されたように、カテゴリーの超越論的演繹におけるカントの取り組みは次の点を説明することにあつた。感性的に与えられるわけではない概念の秩序であるカテゴリーが、事物の秩序そのものでもあると言えるのはなぜか。言い換えれば、述定の最高類としてのカテゴリーと存在者の最高類としてのカテゴリーが、前者は感性的直観を通じて与えられるものではないにもかかわらず一致すると言えるのはなぜか。これは、認識論が存在論と一致すると言える根拠を与えるという企てである。

この基本的な問題構図を踏まえると、カテゴリーは思考の形式だから現象に対して妥当するだけで物自体には関わらないという結論は、正しいとしても、ニュアンスに富んだ仕方で受け取られなければならない。カテゴリーによって可能になる対象認識は、ヘーゲルがそうみなしたように「単に主観的」であつて事物そのものには関わらない、という意味で受け取られてはならない。物自体には関わらないとしても、カテゴリーは単に主観的なのではなく対象そのものの秩序と一致する、ということ、説得力ある仕方で示す必要がある。

色メガネが挟まった三項図式を前提してしまうと、どうしてもこの説得力が出てこない。カテゴリーは現象の秩序であるが、物自体の秩序だとまでは言えない、だから我々の認識は一種の集団妄想のようなものであつて世界それ自体には触れることができない、となってしまう。このような演繹論理解をどう改定していくかが問われる。本共同討議では、近堂秀会員、村井忠康会員とともにこの問題を議論した。

近堂会員は、主に20世紀の最後の四半世紀に論じられた演繹論理解を概観したのち、主観の外にある対象との区別を含む、いわばヴォルフ的な自己意識論を提示した。しかしこれによって色メガネ図式がどう廃棄されるのかという点を明示的に議論できなかった。村井会員は、判断に依存しない直観におけるカテゴリーの妥当性を示すという点に色メガネ図式を克服する足掛かりを得ようとする点で、中野裕考『カントの自己触発論』と軌を一にした。しかし村井会員は、中野の自己触発理解が直観受容の運動を主体の意図的行為に限定していると批判し、意図的行為に至らない直観形成を捉えるべきだと説いた。この中野批判がはたして正当かどうか疑問が残ったが、議論の時間が足りず詰められなかった。『純粹理性批判』の演繹論の成否、そして現代におけるさらなる展開の道筋といった、本来議論したかった論点についてもまったく手を付けられなかった。他日を期したい。